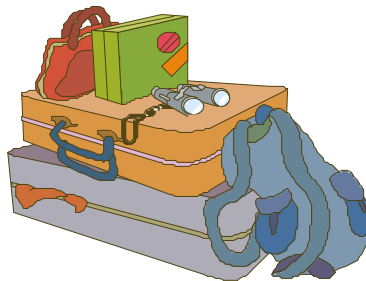


夏の旅行のおともに クロスロード！

発行元：108-8345 港区三田2-15-45
慶應義塾大学商学部 吉川肇子研究室内
クロスロードサポーター事務局

列車で、車で、クロスロード！

ファシリテータのみなさん、夏休みの計画はお決まりですか？家族で、友人で旅行を計画されている方も多いと思います。列車の車窓から、景色を眺めつつ、あるいは車でお出かけの方は、渋滞に巻き込まれたら、家族やお友達と車内クロスロードはいかがですか？「車は渋滞していつになったら帰り着くのか見当もつかない。あと1キロ先にパーキングエリアの案内が。。。休憩したいけれど、寄ったらますます帰宅が遅くなる。立ち寄る？」



さて、今号はぐらっとバック；かぶっちょきの実用新案登録をお祝いした特集や、4月から古巣の消防本部へ異動された四日市市の人見様から、民生委員でなさったクロスロードの報告(下の写真2枚をご覧ください)、福井県あわら市からの雪害クロスロード問題など新しい紹介も盛りだくさんです。読むべし！読むべし！



四日市市での実施の様子



実用新案登録決定！ ぐらっとバック・かぶっちょき

ファシリテータの集いで紹介され、ファシリテータの中では所持率高し！の「ぐらっとバック・かぶっちょき」ですが、このたび実用新案登録も決定されたこのことです（「登録第3132254号 手提げ袋兼用防災頭巾」）

前号で予告しましたとおり、ドリーズ・イースト代表/キッズガーデン世話人をなさっている谷口 静香様より原稿を寄せていただきました。2ページからの紹介です。

また、ドリーズ・イーストでは、ブログ「ドリー*ドリー」も開設されたので、ご紹介します。来るべき震災に備え、人の被害が少しでも減らしていけるように、制作方法を連載で掲載されています。裁縫に自信あり！の方はチャレンジしてみてもいかがでしょうか？

<http://plaza.rakuten.co.jp/doly2007/>

目次

夏の旅行に クロスロード！	1
実用新案登録決定	1
かぶっちょき できました！	2-3
高知県立図書館に かぶっちょき	3
民生・児童委員 クロスロード	4
雪害クロスロード	5
こんなところに 心理学(12)	6
全県的な運動までの 道のり	6
ダック！ダック！ ダーク！	7
ぐらっとバックで あそぼうさい	8
南海地震条例 意見募集開始	8
条例の名づけ	8

クロスロード次号の
ご案内
発行予定日：7. 26
4K横綱対決！
高知から！神戸から！
呉から！亀岡から！

責任編集

- ・ チームクロスロード
- ・ クロスロード・サポーター
- ・ SPECIAL THANKS:
高知県地震・防災課
小溝智子（漫画企画）

オリジナル防災頭巾兼用バッグ「かぶっちょき」できました！

私達は、南海地震の際には大きな被害が予想されている地域（主に高知県東部）に在住しております、ワーキンググループ「ドリーズ・イースト」です。

「ドリーズ・イースト」は、メンバーの得意分野により幾つかの部門（テープ起こし、託児ボランティア、家事介助、フリーマーケット）に分かれて活動していますが、以前からあたためてきましたキッズガーデン・オリジナル防災頭巾兼用バッグ「ぐらっとバッグ・かぶっちょき」（略してGB）を実用新案登録し、新たにGB部門を設立しました。

オフィスのある安芸市は高知県の東部に位置し、海や山に囲まれた豊かな自然環境に恵まれた地域です。豊かな自然の中で、子どもたちと一緒に過ごす時間を大切にできる活動を探してきました。

子どもたちが小さい頃は親子ふれあいサロン「キッズ・ガーデン」としてボランティア活動を続けてきましたが、子どもたちの成長とともに私達の夢でもありました、親と子が一緒に通えるオフィスをつくりたいと「ドリーズ・イースト」を結成し、中山間地域に在住していても、子育て中でもゆっくと充実感のある仕事ができる環境を目指して、安芸市の市議会の議事録作成や高知県の講演会や会議などのテープ起こし等の委託業務を受託するようになりました。

現在では、小さな赤ちゃんを連れてお母さん（キッズ・ガーデン）と、保育園・幼稚園・小学校になるお母さんを連れて仕事をしているお母さん（ドリーズ・イースト）が同じ空間で過ごす新しい環境ができ、メンバーは双方併せて50人を超えるまでになりました。

地域の繋がりや生活の知恵の伝承、子どもたち同士のコミュニケーションなど、様々な効果を生むことに気づいただけでなく、この業務委託が素晴らしいきっかけとなり、当時小学1年生だった長男（現在小学6年生）と、次男が毎日持って登下校している「防災頭巾兼用図書バッグ」が、約6年の歳月をかけて日の目をみることになりました。



横型



縦型

私達は安芸市でも海岸近くに在住していることもあり、南海地震については日頃より母親同士子どもたちとも話す機会が多く、防災頭巾をメンバーの「ひばあさん（曾祖母）」に作成してもらったことが、最初の防災意識への一歩でした。出来上がった見事な頭巾をリュックサックに入れておくのが忍びなく、いつも持ち歩けるようにしたいと考えて思いついたのが「防災頭巾兼用図書バッグ」でした。

「図書バッグ」は、子どもとともに移動するという特性があります。学校でも家でも所定の場所にあり、学校の登下校の際も毎日必ず携帯しています。

地震発生の場合、最も心配な登下校時の子どもたちの安全を願い作成しました。

実用新案に申請するまでに何度も皆の意見を取り入れ、改良を繰り返すことで多くの父母や地域、子どもたち自身の思いを盛り込んだ温かいGBに仕上がりました。

現在は、ファスナーを開けボタンを外し反転させるだけで防災頭巾になるだけでなく、バッグとしても手提げにリュックにと、7パターンに展開できるようになりました。

子どもから出た意見の中に、「地震がおきたら、真っ暗で道具がない」という悪条件への心配がありましたので、子ども用内側には蛍光色の防災布を使用し、バッグ底の部分には「竹定規」を入れるポケットを作りましたので、脇ポケットに「三角巾」を入れておくことで怪我をした際の応急処置ができるようにしました。

また、内側のポケット内には、緊急連絡先・血液型・既往症など記入できる連絡カードをプリントし貼り付けることで、外出中であっても早急な応急処置を受けられ、一刻も早く家族と出会えるような配慮をしました。

現在、大人用アレンジ「パソコンバッグタイプ」「エコバッグタイプ」などを作成中です。子どもから大人まで万が一の際には、自分を守ることができて、目の前にいる人も守ることのできる、ささやかですがお役に立てる「防災頭巾兼用バッグ」であり、日常生活においても機能的で、何よりもお気に入りのバッグであることを大切にしています。

普及を願いながらも一方で、「中山間地域で作成している手づくりの防災頭巾」という小さな取り組みのため、量産体制には限界があると感じています。

GBをご存知の皆様より、お声をかけていただきながらも、なかなか一歩を踏み出せずにはおりましたが、この度、矢守先生より防災について日頃より熱心に取り組まれている皆様から読まれている「クロスロード新聞」にGBをとの、光栄なお話をいただきましたので、各地域でも製作できるような仕組みのお知恵も皆様よりいただきたいと思い、ジレンマ解決への一筋の光を求めて紹介させていただきました。

また、バッグから頭巾にする練習を日頃から重ねる中で、パニックを起こさない安心感とともに、親子・学校・地域で防災意識を高めるお手伝いができればと願っています。

オリジナルGBの製作販売には限界がありますが、解決策の一つとして、お声をかけていただければ、子どもたちへの普及のために作成講習会にも積極的に伺いたいと思います。

また、お待ちいただける方には、御理解いただきながらお打ち合わせを重ね、日常使っていただけるオーダーメイドGBや、子どもたちと楽しく防災意識を高めるゲームなどに使っていただけるGBを、大切に作成してまいりたいと思います。

美しいだけではない自然との生活の中で生まれ、それでもこの地で生活する知恵がとけこんだ、お気に入りのGB（防災頭巾）が目標です。メンバーの願いを御理解いただき、ご愛用くださっている皆様と、お手元に届くまでのあらゆる過程を支えてくださっている皆様に、深く感謝の気持ちを込めて寄稿させていただきました。

これからも、皆さんに喜ばれる防災頭巾を作成してまいりたいと思いますので、よろしく願いいたします。

（ドリーズ・イースト代表/キッズガーデン世話人 谷口 静香さん）

かぶっちょきを県立図書館に寄贈

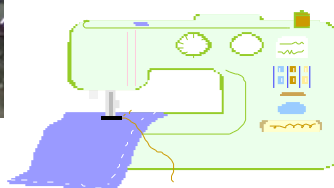
ドリーズ・イーストでは、高知県立図書館に「GB・かぶっちょき」を寄贈されました。写真をご覧ください。高知県では、地震防災に県立図書館が大いに協力されているそうです。県立図書館の成人室の入り口という特等席に南海地震情報コーナーを設置し、地震関連の図書を集めてあったり、蔵書目録を作成して置かれたりしてあるとのこと。また、地震に関連する記事が朝刊に載ったら、すぐさま記事が掲示され、関連図書がPRされます。地震関連のシンポジウム等が開かれると、講師の蔵書もポップつきで紹介、というタイムリーな企画もあるそうです。

その南海地震情報コーナーに寄贈された「GB」が展示され、利用者の目をひいています。



贈呈式の様子

地震コーナーの壁に
注目！注目！
(右上です)



ところで、お気づきですか？

クロスロードファシリテータ共有システムに新しい問題が追加されています。感染症編、マンション編です。そして、今回ご提供いただいたあわら市編もフルバージョンで掲載です(5ページの記事にご注目！)。

<http://maechan.net/crossroad/common/>

新聞第8号を参考に、ダウンロードをしてください。ダウンロードの際、お知らせしたパスワードが必要です。

熱いトークバトルが炸裂！！

民生・児童委員 クロスロード防災研修会を終えて

四日市市では、平成18年度から民生委員・児童委員（以下民生児童委員）のスローガンでもある「災害時ひとりも見逃さない運動」とタイアップして、災害時要援護者台帳登録する「災害時要援護者支援活動」を市内全域一斉に取り掛かりました。対象者の名簿に基づいて、1軒、1軒を訪問しての同意確認を実施し、市内で計1万5000人の方が、制度への登録を希望し、現在、地域支援者の選定を含む災害時要援護者台帳の作成を進めています。

こうした活動を全面的にバックアップいただく民生児童委員の方は市内で総勢566名、それを北部、中部、南部、西部の4ブロックに分かれて、活動しています。今年度の年次総会では、同志社大学の立木先生を講師に招き「防災と市民力」と題して、災害時における民生児童委員の役割とその責務について公演をいただくとともに、年次計画に基づいて、各ブロック毎に防災に関する取り組みや研修会などを開催していただきました。

そうした中、各ブロック毎に防災に関する意識啓発に主眼を置いた研修会を開きたいという要望から、研修項目について検討した結果、以前呉市さんで取組まれたように、クロスロードを用いた防災研修会が取り上げられ、今回、中部と南部の協議会で実践することとなりました。今回は、その結果についてレポートします。

今回、市内ではじめて民生児童委員を対象としたクロスロードを行いました。中部ブロックは2月13日、南部ブロックは3月31日に実施しました。前述したように今年度の四日市市民生児童委員協議会の活動は、防災一色で取り組んでいただけてきたことから、各委員の関心も大変高く、また3月25日に能登半島地震が発生したことから、予想以上に盛り上がった研修会となりました。

各研修会ともに、採用した問題は統一し、①〔市民編5005番〕津波災害発生時の要援護者宅への訪問、②〔神戸編1008番〕避難所における食料の配布及び③〔要援護者編001番〕災害時要援護者情報の提供と地図への記入の3問とし、参加者が地域での取り組みを交えて、積極的な意見交換ができるようにしました。

まず、驚いたのが導入です。通常、こうした研修会はアイスブレイクといって参加者の関心を高めるために、興味のある話題などを提示し、参加者の意見が出やすい雰囲気づくりを行うようにしているのですが、今回の研修会では冒頭の自己紹介から自発的にてきぱきと対応いただける点に驚きました。普段、取り組んでいる自治会での研修会では、こうしたことは珍しいことで、今回の両会場ともに、早く研修に入ってほしいという参加者の意欲がひしひしと感じられ、民生児童委員の方の防災に対する関心の高さを感じた次第であります。

当然のことながら、課題に対する議論も冒頭から激

しい議論が炸裂し、皆さんの日常の活動の経験を踏まえてのさまざまなご意見をいただきました。

①の津波発生時の要援護者宅への訪問については、「災害発生時については、訪問できないことから、その旨について、事前に理解を求めておく」という意見のほかに「平常時から訪問しており、何かあれば私がくるからねといっていることから、訪問しないわけにはいかない。」などの意見が聞かれました。

②の避難所での食料の配布については、やはり「高齢者、障害者や子どもなど災害時要援護者を優先」という意見が多かった反面、「災害活動に従事していただく方への食料配分についても考慮しなければいけない」との意見が出されました。また、配布する方法についても、「おにぎりなら、ほぐして人数分に握りなおす」とか「すべてを雑炊にして全員に分ける」などの主婦ならではのユニークな意見も出されました。

③の災害時要援護者の地域防災マップの記入については、能登半島地震の際の門前町での民生児童委員の方の作った要援護者マップが安否確認に役に立ったという事例からほぼ全員の方が「個人情報という問題はあがるが、災害時に命を救うためには必要不可欠である。」という意見にまとまりました。

結果的には上記のように方向性を出したものの、その過程ではさまざまな意見が活発に討議され、今までの経験則を踏まえての発言には含蓄のあるものが少なくありませんでした。災害時要援護者の形態は百態百様であり、さまざまなケースが入り混じっています。そうした一人一人に対してのオーダーメイド的な対応が必要となってきました。民生児童委員の方も、ひとりあたりの担当数は年々増加しており、そうしたことから今後、地域の自主防災隊（自治会）と一体となったサポート体制を検討することが必要であると強く感じました。

クロスロードの意味には人と人が交わる場所という意味があると矢守先生もおっしゃられて見えますが、今回の研修を通じて、いろいろな地域の方の意見を聞くことができたことは民生委員の方の防災意識の啓発に大きな意味を持つものと感じています。研修後のアンケートでも参加者全員（100%）が今回の研修について「たいへんよかった」「よかった」とその有益性を認めるとともに、各地域での個別の開催を希望してみえます。多くの方が、従来の研修にない自発的な研修会について、評価が高いことは過去の実施事例からすでに周知の事実ではありますが、今回そうしたことが市内の民生児童委員の方に広報できたという点ことは、今後の市内の防災活動の活性化について、何物にも変えがたい一歩が踏み出せたものと感じています。

今後も市内各地にこうした「気づきの種」を撒きつつ、その種がいつか花を咲かせる 때가くることを期待しつつ、クロスロードを広めてゆきたいと感じています。

（四日市市消防本部 人見実男さん）

雪害クロスロード

福井県あわら市社会福祉協議会の平田豪(ひらた すぐる)様より、クロスロードの新作問題をたくさんいただきました。全部をご紹介することは紙面の都合で今回難しいのですが、特に福井県で多い雪害の問題を中心にご紹介いたします。まず平田様の自己紹介から。

あわら市は福井県の北端、石川県の加賀市に接する農業と温泉の町で、平成16年に芦原町と金津町が合併してできました。人口は約3万人、4人に1人が高齢者で、市街地中心部と山間部で高齢化・一人暮らし化が進んでいます。最近、自治会で地域防災に取り組むところが始まったことから、これを支援するためのツールとして、クロスロードの利用法を研究し始めたところです。

まだ使用実績のないベータ版ですが、自治会で話し合われている問題点を中心に、あわら市で使うことを想定して作ってみました。特に雪害に関して、災害と捉えて対処法を探ろうという動きに答えるべくジレンマの作成を試みましたので、毎年降雪に悩む各地の皆様に御講評を賜りたいと存じます。

市民	暴風雨により水害発生が懸念されるため、避難勧告がでた。隣の町内には長男夫婦が住んでいて、避難勧告が出ているようだが、指定避難場所が違っている。 長男夫婦と同じ所へ避難する？	同じ所に避難	指定地に避難
旅館経営者	未明の地震発生から15時間。施設は大規模な損壊を免れ、宿泊客は兎にも角にも安全な所へ送り届けたが、市役所から施設を避難所に提供して欲しいとの打診。既に大勢の人が玄関に詰め掛けている。避難所を一端受け入れると、閉鎖はいつになるか分からない。収容が長引けば事業再開に影響が出るのは必至。 避難所を受け入れる？	受け入れる	受け入れない
町内会長(区長)	大雪のため町内の大半が雪に埋もれた。道路の積雪量が60センチを超えたので除雪車を雇ったが、事前に回覧で知らせたにも関わらず、路上駐車のあるため入れないと言われた。はみ出しはわずか20センチほどだが、破損しても責任をもてないと言われた。 除雪を依頼する？	する	しない
町内会長(区長)	記録的大雪で、積雪は80センチを超えた。明日の午後、市の除雪車が排雪に来てくれるというので一斉に町内の雪下ろしをしたいが、平日のため若い人がどれくらい参加してくれるかわからない。 一斉雪下ろしを行う？	する	しない
一人暮らし高齢者	記録的大雪で、積雪は80センチを超えた。家がきしみ、襖が開きにくくなり始めたが、雪はまだ降るという予報。明日の午後、町内一斉に雪下ろしをすると連絡があったが、前回屋根に上がったのは10年以上も前のこと、今は70を過ぎて足元も不安だが、代わりに上がってくれる人が見つからない。 自分で雪下ろしをする？	する	しない
サラリーマン	積雪量は40センチ。大した雪ではないが短時間で降り積もったため、除雪作業の遅れから道路は大渋滞。公共交通機関も遅れが出ている。勤務先へは通常車で通っているが、何時に着けるかわからない。鉄道も遅れている上、自宅も職場も駅から遠い。 車で出勤する？	する	しない
サラリーマン	記録的大雪で、積雪は70センチ。職場のある地域は比較的雪が少なく、仕事は通常通り。町内の道には除雪車が入らないため、急病人が出て救急車が近づけない状態。町内には病弱の人や一人暮らしのお年寄りがいるため心配。 仕事を休んで町内の除雪をする？	する	しない

こんなところに心理学(12)：ロコミのネットワーク

心理学には「世界は狭いね」(It's a small world :イツ・ア・スモールワールド) 仮説があります。

皆さんは、初対面の方と話しているうちに、実は同じ学校の卒業生同士であることがわかったり、共通の知人を見つけたりされた経験はありませんか?そのとき、「世間は狭いですね。」と、思わずいわれることもあると思います。でも、理論的にも、実際にも、本当に世間は狭いんですよ。

たとえば、皆さん、何人の知人をお持ちでしょうか?つきあいの多い人、少ない人、いろいろでしょうが、たとえば、平均的に500人くらいの知人がいると考えてみてください。その500人の知人にも、また500人の知人がいますよね。その知人にもさらに知人がいる、という風に考えて、ちょっと計算してみてください。なんと、

$$500人 \times 500人 \times 500人 = 1億2500万人$$

と、なります。つまり、間に3人の知人をはさめば、日本人の総人口を超える数の人と知り合い、ということになってしまうのです。「友だちの友だちの友だちは、皆友だち」ということになります。

実際には、友だち同士共通の知人がいたりして重複がありますから、この計算のように、単純に3人をはさんで全国民が知り合いに、というわけにはいきません。しかし、実際に日本人で調べたところ、平均5.8人の知人でつながることがわかっています。意外と少ないと思いませんか?

どうやって調べたか、おわかりですか?まず、目標人物の方を決めて、その人の住所と名前などの手がかりを、調査参加者に知らせます。そして、その方に届くように、知人に手紙を送ってもらう、というやり方です。昔、不幸の手紙というのがはやりましたが、それと似たような方法です。もちろん、すぐには目標人物にはとどかないですが、こうやって手紙をつなげていくと、何通目かで目標人物につながるということです。

知人の数も、人によって多かったり少なかったりいろいろですが、自分の知人がどのくらいいるか、ちょっと考えてみてください。10人くらいかな?とっておられる方も、携帯の番号の登録人数や、年賀状を出される数、などを考えてみると、意外とたくさんいるなあと感じられるのではないのでしょうか?知人ではありませんが、大学生に1週間、口をきいた相手の数を記録させたところ、数十人から100人くらいでした。なんと、1000人を超えた学生もいました。

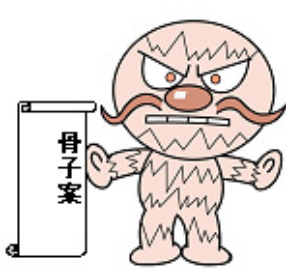


このように「世間が狭い」ことは、うわさの伝播の速さにつながっています。たとえば、1973年の豊川信用金庫の取りつけ騒ぎ(女子高生3人の何気ない冗談から、5日後には20億円の預金引き出しにつながった)でも、美容院での会話や、幼稚園のお母さん同士の会話、ご用聞きにきた店主との会話が、うわさを爆発的に広げました。また、ニュースの伝播の速さを調べた研究でも、マス・メディアで報道されるよりも、人のロコミにのったニュースの方が早く伝わったことを明らかにしています。

関東大震災の時には、朝鮮人が井戸に毒を入れたという事実でないうわさが広まって、多くの無実の人が殺されました。うわさは、人々の関心が高く、状況が曖昧なときに生まれてきます。災害時は、人々が必要としている情報が不足しがちですから、うわさが起こりやすい状況といえます。

災害時に限らず、事実でないうわさを打ち消すことは難しい問題です。この問題に対処するため、アメリカでは、うわさを通報して事実を確認できる「うわさコントロールセンター」が設置されています。

でも、ちょっと見方を変えて考えてみてください。この強力なロコミのネットワークを、日頃の防災の普及活動に使わない手はありません。1人の人に伝えることが、その背後にある多くの知人に伝えてもらうことにつながるのです。家庭で、職場で、ちょっとずつでも防災のことを話してみることが大切ですね。

全県的な運動までの道のり ©やなせたかし

全県的な運動までの道のり	<p>平成19年6月に公表された意見募集中の高知県南海地震条例の骨子案には、</p> 	<p>基本理念のひとつに、</p> <p>広く呼びかけながら、取組の輪を広げ...</p>  <p>という野望に満ちた言葉がある。</p>	<p>県人口が79万人なので、</p> <p>😊 100人が</p> <p>😊😊 に伝えて、</p> <p>さらに😊😊😊 に伝えたら、全人口に伝わる計算! すばらしい、道は近いぞ</p> <p>全県的な運動の達成</p>	<p>県民みんながおしゃべり好きになった上で、</p> <p>人の顔や名前が最近思い出せん</p>  <p>ということが、なくなれば、もっと近い! のに</p>
--------------	--	--	---	---

ダック！ ダック！ ダーック！ — 「自助の心は幼児から」 ぼうさいダック，呉から全国へ発信中！ —

【はじめに】

幼稚園の防災訓練は、給食室からの出火を想定、非常ベルを鳴らし、非常放送を聞かせ、「静かに早くお庭へ！」。園庭に避難させる訓練がほとんどです。教室内で先生と園児が一緒にいて、先生が具体的な指示を出し、園児がそれを聞いて初めて動くという前提で成り立っています。しかし、災害は突然やって来ます。園庭で遊んでいた、通園中に突然グラツときたら、そのとき何ができるかという視点は意外にも忘れられているのです。

園児にとっては受身・指示待ち、保育士先生にとっては台本設定という、この日本独特の訓練に、自分のからだは自分で守るという「安心・安全の第一歩」「自助の心」を芽生えさせる、画期的な防災教育ツールが「ぼうさいダック」です。今、「ぼうさいダック」が呉市でブレイクしています。不安だらけの初めてのダックから、吉川肇子先生をお招きしての地域公開ダック、そして全市的な取組みになった今日に至るまでを、連載でご紹介したいと思います。

【初めてのダック】

昨春秋、市内の幼稚園でダックはデビューしました。「進行はどうすればいいのだろう？危険から身を守るポーズを取るだけで子供達は楽しむだろうか？ルールは理解できる？ウケなかったら？」という不安の「津波」が押し寄せながら当日を迎え、「とりあえず、プロジェクターの大画面とアニメーション（※パワポ）で子供達を引き付けよう！」という姑息な考えでスタートさせました。幸いにも、子供達は消防車や救急車にとっても興味を持っていますので、まずイラストの消防車・救急車を示し、実際のサイレン音を聞いてもらい、「サイレンを鳴らして消防車や救急車が来たらどうするの？」という問いかけをしました。「手を振る！」「逃げる」と子供らしい答えが返るのですが、「サイレンが鳴っている時は困っている人がいます。ちゃんと道の端に避けましょうね」と、「〇〇が起きたとき、どう行動するのか」ということに着目させます。

続いて「みんな地震って、知ってる？」と聞くと、「知ってる！」「グラグラ揺れる」と殆どの子供達が元気良く答えてくれます。しかし、「じゃあ地震が起きたらどうするの？」と問いかけると、答えは…ありません。ほぼ全員、地震が起きた時の対応は知らない・分からないといった状態なのです。

【みんな楽しくダック！】

「じゃあ、これから楽しいゲームをしまーす！」の一言で、子供達は再び身を乗り出して話を聞き始めてくれました。ルールの説明は、カードには地震・火事・不審者といった身の回りの危険から、自分でからだを守る対応行動が子供達の大好きな動物が描かれているうえ、からだを動かす声を出して、その可愛い動物のポーズを取るという簡



単なものなので、すぐに理解してくれました。

保育士先生のピアノ演奏のもと、いよいよゲーム開始です！「さんぼ」を歌って足踏みをし、音楽が止まったら「危険カード」を無秩序に示します。年長さん・年中さんは、我先に答えようと一所懸命に取り組んでくれます。年少さんは、それに釣られるように楽しむ姿が見られました。音楽のテンポを早くして繰り返したり、子供達の回りをスキップしたところ、子供達は大喜びでした。

これまでのように、保育士先生主体の訓練ではなく、子供達が中心となって、しかも楽しく遊びながら防災知識・自助の心を身に付けることができる訓練は、「カードで楽しく学ぶユニークな防災訓練」と地元の新聞に大きく取上げられました。子供達も楽しい、保育士先生も楽しい、観ている保護者も楽しい、実施する消防職員も楽しい、楽しいづくめの「ぼうさいダック」は、あっという間にロコミで、市内の幼稚園・保育園・保育所へ伝わって行ったのです。

【思わぬ落とし穴】

しかし、しかし、その楽しいばかりの「ぼうさいダック」にもピットフォール（落とし穴）がありました。それは…、子供達が「地震＝なまず」を理解できないのです。なまずを知らない、見たことがないのです。子供達が理解していないまま、我々大人の視点で、ダックを進めていることに気付いたのです…。子供達に「地震＝なまず」を理解してもらうため、情報の東奔西走が始まりました。はてさて、どうなったことやら…。

（続きは次号へ）

（呉市消防局 林 国夫さん）

小溝さんより提案！ 幼稚園や保育園ではやらせたい ぐらっとバックで「あそぼうさい」 「つなみまんザブン」 ごっこ



©やなせたかし



©やなせたかし

2ページ、3ページに紹介したぐらっとバックで、防災訓練はいかがですか？ 高知県の小溝さんより遊び方を提案していただきました！ 次回実施された園での実践報告もお待ちしています！

用いるもの：赤・青リバーシブルのぐらっとバック人数分

遊び方：ゲーム開始のかけ声は、「用意ドン」でなく「じしんまんドーン！」。その合図で、青い頭巾をかぶった「つなみまん」（鬼）が、赤い頭巾をかぶった「あそぼうさい頭巾ちゃん」たちをつかまえに走り回ります。つなみまんタッチされたら、その子が今度は「つなみまん」役。

頭巾を裏返したり、ひもを結ぶ速度もスピードアップが肝心。揺れのあと、頭を守りながら、津波から走って高台や津波避難ビルに逃げる・・・それを遊びの中で理解してもらおうというのがこの遊びの味噌です。津波が上陸してくる時の速さが、オリンピックの100メートル走の金メダリストくらいの速さというのですから、足の速い子に追いつかれないようにするというのは、大事なことです。

高台陣地（10秒間入って休める）や津波避難ビル陣地（5秒間入って休める）を地面にいくつか描いて、それぞれの時間そこに入れる、又は、人が三人以上になると最初に入った人は外に出なければいけないとかいうルールを加えて、遊びを面白くすることができるかもしれません。

注目！注目！高知県の南海地震条例の骨子案への意見募集開始

平成18年5月から県民とともに作るプロセスを大事にしながら高知県で作っている南海地震条例の骨子案が公開されました。6月18日から7月31日まで意見募集中です。詳しくは、高知県地震・防災課のホームページをご覧ください。

条例の名づけ

<http://www.pref.kochi.jp/~jisinbousai/jourei/joureitop.htm>

©やなせたかし

<p>条例の名づけ</p>	<p>「南海地震条例」というのは略称で、本当は「高知県南海地震に強い地域社会づくり条例」という公表用の名前がある。</p>  <p>じしんまん</p>	<p>「じしんまん」だけ条例の名前に「地震」の文字入れてもらってる！僕らの名前は入ってないのか・・・</p> 	<p>嫌ザブン。防災キャラみんなの名前が入れるよう県に意見を提出するザブン。考えろ、ゆうどうくん！</p>  <p>つなみまん</p>	<p>南海トラフ（トラフ博士）を震源とし大津波（つなみまん）を伴う南海地震（じしんまん）から高知県民の命を助ける（ヘルバちゃん）ための対策（たいさくくん）を県民運動として誘導する（ゆうどうくん）条例</p> <p>こんなのどう？</p> 
---------------	--	--	---	--